

昔ながらのふるまいで、心地よく暮らしを

日本人はその昔、さまざまな所作・動作で人間関係を円滑に、かつ心身の健康を保っていた。だが、生活の欧米化によって、日本的な所作・動作は消滅――。

「他人様の目を気にする」精神すら失われ、いわゆる世間も消滅した。心身の健康を取り戻すために――熊倉功夫さんに聞いた。

静岡文化芸術大学学長

熊倉功夫

●くまくら・いさお 1943年東京生まれ。日本文化史、茶道史専攻。国立民族学博物館名誉教授。『茶の湯日和―うんちく遊ぶ』(里文出版)、『茶の湯といけばなの歴史』(放送大学叢書)、『日本料理の歴史』(吉川弘文館歴史文化ライブラリー)など、多くの著作がある。

正座が「正座」になったわけ

身のこなしやしぐさなど、日本人のふるまいには非常に独特なものがあります。靴を履き、洋服を着るようになって、生活がいくら欧米化したといっても、日本固有のふるまいは、身体のごどこかに必ず記憶されているはず。しかし現実的には、

多くの動作や所作が忘れられつつありますね。

「座る」という動作ひとつとっても、日本ならではの座り方がたくさんあるんですよ。正座や胡坐ばかりが、伝統的な日本の座り方ではないんです。

膝を折り曲げ、かかとの上に尻を乗せつつ両足の親指を重ね、膝の前面を軽く開けて座る。いま正座といわ

国民礼法では武士の作法がひとつの基準になったため、武士の「かしこまる」を「正座」としたのだと思います。が、「かしこまる」の姿勢は恭順の意を表す姿勢でありながら、胡坐などと違って、つま先を立てるとすぐに立つことができます。そういった意味では従者の姿勢でもあり、

国民の天皇陛下に対する恭順と従属を表すことから、正座が礼儀正しい座り方として一般的になったという側面もあるようです。

日本には多様な座り方があった

お茶の世界で、いまの正座が正式な座り方となったのもごく最近で、重要文化財になっている表千家の千利休像は胡坐をかいています。江戸時代以前は身分や格式によって正座の形がそれぞれ違って、武士に

とつての正座は胡坐だったので、織田信長も豊臣秀吉も、胡坐でお茶を飲んでいたはず。公家の正座は「亀居」といいます。亀居では、お尻を床にペタッとつけて、折り曲げた両足を正座のように尻の下に敷かず、脇に出してしまいません。これだと足に体重がかからないため、しびれる心配がなく、

宮中などで長時間儀式をするお公家さん向きの座り方だったといえるでしょう。片膝を立てつつ、もう片方の足で胡坐を組む座り方を「歌膝」といいますが、これは歌人が和歌を詠むときのスタイルで、柿本人麻呂像などは、この座り方をしています。歌膝で胡坐を組んだ足を正座のように折りたたむと「片膝立ち」で、武士が控えているときの姿勢になります。能の舞台上でシテが舞っているとき、

れるこの姿勢はもともと「かしこまる」などと呼ばれ、武士が主君に対してかしこまる姿勢を表しているのですが、「かしこまる」を「正座」と呼ぶようになるのは明治以降です。明治になって四民平等となり、「国民」という新しい概念が生まれたため、身分や格式によってさまざまな礼法を、国民礼法というかたちで一元化する必要があったのです。

ワキである旅の僧なども、よくこうして座っています。

歌膝にしても片膝立ちにしても、立て膝で座るのはとても楽で、昔は女性もよくこうして座っていました。朝鮮半島ではいまでもやっていますね。立て膝は東アジアの基本的な座り方でもあるんです。日本の場合、時代とともに着物の身幅が狭くなつて、きちんと座らないと着物がはだけてしまうようになったので、立て膝で座る習慣が廃れてしまったのだと思います。



亀居(割居) かりざ